

## レーゲンスブルク大学地理学教室瞥見

小 田 匡 保

### I. はじめに——レーゲンスブルク大学の概要

筆者は、1994年4月から1995年3月までの1年間、ドイツのレーゲンスブルク大学に駒澤大学の公費在外研究員として滞在した。現地ではキリスト教巡礼(地)を中心に研究を進めたが、その一方、レーゲンスブルク大学地理学教室についてもいくらか知るところがあった。海外の大学の地理学教室の事情については、留学者や在外研究者の個人的経験談から断片的に知見を得ることも少なくないが、改めてまとまった記述をしたものは、そう多くはないのではないかと思われる。本稿は、筆者の個人的経験を身の回りの人との雑談や私信に埋もれさせることを惜しみ、見聞録にはすぎないが、レーゲンスブルク大学地理学教室の概要について報告しようとするものである。

ところで、筆者の滞在したレーゲンスブルクは、ドイツ南部バイエルン州の、ドナウ河岸に位置する中都市である。人口約14万人で、バイエルン州ではミュンヘン・ニュルンベルク・アウグスブルクに次ぎ、ヴュルツブルクと並ぶ規模をもつ。レーゲンスブルクの旧市街は、ドナウ川の南岸に広がるが、レーゲンスブルク大学のキャンパスは、そのさらに南のなだらかな丘陵上にある。

レーゲンスブルクの町は、ローマ軍の駐屯地にさかのぼる長い歴史を持つが、レーゲンスブルク大学自体は、第二次世界大戦後に開設された新しい大学である。すなわち、1962年バイエルン州議会によって大学の創設が議決され、1967/68年の冬学期から人文・社会系学部(地理を含む)で授業が始まっている。自然系学部の開講もまもなくそれに続いた<sup>1)</sup>。

学部(Fakultät)は全部で12ある。列举すると次のとおりである。カトリック神学部・法学部・経済学部・医学部・人文学部Ⅰ(哲学・スポーツ・芸術学)・人文学部Ⅱ(心理学・教育学)・人文学部Ⅲ(歴史・社会・地理)・人文学部Ⅳ(言語学・文学)・自然科学部Ⅰ(数学)・自然科学部Ⅱ(物理学)・自然科学部Ⅲ(生物学・臨床前医学)・自然科学部Ⅳ(化学・薬学)。このうち人文学部(Philosophische Fakultät)Ⅲが、さらに歴史学教室、社会学教室、政治学教室、そして地理学教室(Institut für Geographie)に分かれている。ただし、これらの「教室」は教員組織上の区分のようで、学生の専攻(Studienfach)は、歴史・先原史・社会学・社会科・政治学・地理学(Geographie)・地理科(Erdkunde)に分かれている。このうち「地理学」は学士・修士を目的とするもの、「地理科」は教職を目的とするもの

である<sup>2)</sup>。

学生数は表1のとおりで、だいたい16000人強である<sup>3)</sup>。そのうち女子学生が半数弱、外国人学生も5%程度いる(1995年夏学期では、アメリカ・イギリス・オーストリア・韓国・フランスの順に多い)。教職員数は、1991年12月現在で2842人(教授312人、学術職員758人、事務職員1772人)となっている<sup>4)</sup>。

表1 レーゲンスブルク大学学生数

学 期	学生数	女子 (%)		外国人 (%)	
		女子 (%)	外国人 (%)	女子 (%)	外国人 (%)
1993/94冬	16899	8005 (47.4)	841 (5.0)		
1994夏	16103	7626 (47.4)	815 (5.1)		
1994/95冬	16775	8003 (47.7)	815 (4.9)		
1995夏	16000	7687 (48.0)	839 (5.2)		

資料: *Vorlesungsverzeichnis der Universität Regensburg, Sommersemester 1994 - Wintersemester 1995/96.*

## II. 地理学教室の概要

地理学教室の教員スタッフは表2のとおりである(1994/95年冬学期現在)。地理学教室には、自然地理学・人文地理学・経済社会地理学・地理教育の4講座(Lehrstuhl)があり、したがって講座主宰の正教授が4名いる(それぞれに秘書がつく)。それ以外に教授が3名、員外教授が1名、私講師3名、非常勤講師4名、助手などの学術職員が9名である。また、カルトグラファーが3名、写真家が1名いるようである(おそらく講座ごとに1名つくと思われる)。

一方、地理専攻(地理学専攻と地理科専攻を合わせたものをこう呼ぶことにする)の学生数は表3のとおりである。副専攻で地理をとっている学生が含まれている可能性もあるが、900人前後の学生が地理を学んでいることになる<sup>5)</sup>。入学して第何学期に属するかによって、学生数の変動が激しいが、これは学校の授業年度が通常冬学期(秋)から始まるため、冬学期から入学した学生の方が夏学期よりも多くなることによる(地理に関しては夏学期から大学の学業を開始することも可能であるが、学部・専攻により冬学期からの開始しか認められていないところがある)。表3の数値を2学期ずつ集計して、いわゆる学年別の学生数を求めたのが表4である。日本でいう大学1年生が250人以上いる一方で、3年も経つうちに学生が約半数に減少していることがわかる<sup>6)</sup>。ちなみに、卒業所要期間の平均は、学士課程で13.1学期(約6年半)である<sup>7)</sup>(これは大学によって異なる)。

次に、課程別の学生数は、1993年秋のデータでは次のようになっている<sup>8)</sup>。地理を主専攻とする学生894名のうち、学士課程にある者が308名、修士課程<sup>9)</sup>が56名、教職課程(ギムナジウム)が231名、教職課程(実業学校)が67名、教職課程(基幹学校・本科学校)が210名である。なお、男女比の正確なデータは得ていないが、筆者が授業で見ると、半数は女子のようである。地理が女子学生に人気のない日本とは、かなり違った状況にある。

以上のような教員・学生の規模は、ドイツの地理学教室としては大きいほうに属する。教員

表2 レーゲンスブルク大学地理学教室教員一覧 (1994/95年冬学期)

教授

- |                              |               |
|------------------------------|---------------|
| ・ブロイヤー (Breuer, Toni)        | 人文地理学講座正教授    |
| ・エーリッヒ (Ehrig, F. Reiner)    | (地理学・地生態学)    |
| ・ハイネ (Heine, Klaus)          | 自然地理学講座正教授    |
| ・コーラー (Kohler, E. Ewald)     | (応用地質学)       |
| ・マンスケ (Manske, Dietrich)     | (地誌)          |
| ・オープスト (Obst, Johannes)      | 経済・社会地理学講座正教授 |
| ・リンシェーデ (Rinschede, Gisbert) | 地理教育講座正教授     |

員外教授 (Außerplanmäßiger Professor)

- ・ヴェルナー (Werner, Ekkehard)

私講師 (Privatdozenten)

- |  |                      |
|--|----------------------|
| ・レートウリスベルガー (Röthlisberger, Friedrich) |                      |
| ・シュトゥルンク (Strunk, Horst)               | 上級講師 (Akad. Oberrat) |
| ・フェルケル (Völkel, Jörg)                  | 期限付き上級講師             |

非常勤講師 (Lehrbeauftragte)

- ・フレーリッヒ (Fröhlich, Friedrich)
- ・ラング (Lang, Robert)
- ・シュトゥルム (Sturm, Werner)
- ・ヴォルフ (Wolf, Helmut)

学術職員 (Wissenschaftliche Beamte und Angestellte)

- |                                  |                       |
|----------------------------------|-----------------------|
| ・アイベルヴァイザー (Eiberweiser, Martin) | 助手                    |
| ・グラスベルガー (Grasberger, Reiner)    | 助手                    |
| ・ハルトウル (Hartl, Martin)           | 上級教諭 (Oberstudienrat) |
| ・ユルゲンス (Jürgens, Carsten)        | 助手                    |
| ・クライン (Klein, Kurt)              | 講師 (Akad. Direktor)   |
| ・マール (Mahr, Andrea)              | 助手                    |
| ・ニラー (Niller, Hans-Peter)        | 助手                    |
| ・ラウ (Rauh, Jürgen)               | 助手                    |
| ・フォッセン (Vossen, Joachim)         | 助手                    |

・以上の他に、名誉教授としてキック (Kick, Wilhelm) が、退職教授としてヘルメス (Hermes, Karl) とシェーファー (Schaefer, Ingo) がいる。

・カルトグラファー・写真家を含まない。

資料: *Vorlesungsverzeichnis der Universität Regensburg, Wintersemester 1994/95*, S. 226-230.

表3 レーゲンスブルク大学地理専攻学生数(学期別)

学 期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	13<	合計
1993/94冬	202	57	156	57	124	38	79	26	64	19	25	10	11	23	891
1994夏	84	175	51	144	51	128	24	74	24	49	15	21	9	23	872
1994/95冬	208	57	140	46	133	46	114	26	65	22	38	11	13	15	934
1995夏	84	197	51	131	40	132	40	102	22	52	18	32	6	18	925

注：地理学(Geographie)・地理科(Erdkunde)専攻学生を合わせたものである。  
資料：表1に同じ。

表4 レーゲンスブルク大学地理専攻学生数(学年別)

学 年	1	2	3	4	5	6<	合計
1993/94冬	259	213	162	105	83	69	891
1994夏	259	195	179	98	73	68	872
1994/95冬	265	186	179	140	87	77	934
1995夏	281	182	172	142	74	74	925

注：表3に同じ。  
資料：表1に同じ。

表5 ドイツの主要な地理学教室

大 学	教 授	学術職員	学 生	地理主専攻
トリーア大学	18	30	1597	1597
フランクフルト大学	15	21	773	714
ベルリン自由大学	14	36	1293	915
ボーフム大学	14	23	1651	1558
ミュンスター大学	14	17	2650	2380
ボン大学(地理学教室) <sup>1)</sup>	13	26	2103	1530
ベルリン・フンボルト大学	10	23	857	857
バイロイト大学	10	20	790	765
*****				
レーゲンスブルク大学 <sup>2)</sup>	6	17	894	894
全ドイツ平均	5.3	9.2	607	440

1) ボン大学には、他に歴史地理学ゼミナールが別組織としてある。

2) 表2とは資料が異なるので、数値が合わない。

資料：本文注7) S.60-63.

数は中の上くらいであるが、学生数が多く、地理を主専攻とする学生数は、ドイツ全体で第7位である。表5では、ドイツの主要な地理学教室を教授数の多い順にリストアップしておいたが、全ドイツ平均の値と比べれば、レーゲンスブルク大学の規模の大きさが理解されよう。

ところで、地理学教室の部屋は、大学のPT(人文学・神学)館の1階にかたまっている。教員スタッフの研究室、大学院生レベルの学生の部屋の他、地図作業室、地図・スライド・空

中写真・衛星写真・器材などの保管室がある。また、パソコンの部屋も二つあり、学生がよく利用していた。

図書・雑誌類は、図書館で一括管理されている。図書館は中央図書館（本館）と10以上の閲覧室（分館）に分かれており、地理関係の図書・雑誌類は、人文Ⅱ分館に、歴史・神学・心理学・教育学・芸術・民俗学などの本とともに、開架式で配置されている（書庫は本館にある）。本は、それぞれの学問分野ごとにまとめられ、各分野の中で分類がなされている。地理関係の本だけ、とりあえず開架で一瞥しようとする時には便利である。図書の検索にはマイクロフィッシュを使うが、1994年からOPAC（機械検索）が導入された。蔵書数は図書館全体で約270万冊、そのうち分館など開架部分に約120万冊、書庫に約150万冊ある（1993年11月現在）<sup>10)</sup>。利用時間は、人文Ⅱ分館については、平日（月～金）は朝8時から夜の10時まで、土曜日は9時から午後3時まで開いている。ただし学生は、分館の本を、週末を除いて貸出ができない規則になっている<sup>11)</sup>。

地理学教室の開講科目は表6のとおりである。表には1994/95年冬学期のものを示したが、内容は学期によってかなり変わる。前述のように、学校の授業は冬学期から始まるのが通常なので、表6では入門の類の科目が目につく。夏学期は、冬学期に比べ、実習（特に野外実習）・巡検の科目が多くなり、その分ゼミの数が少なくなっている。日が短く、しかも寒くなる冬学期は室内で、逆に夏学期は外のフィールド中心でという傾向がうかがえる。なお、夏学期は4月～9月（うち講義期間は5月～7月）、冬学期は10月～3月（うち講義期間は11月～2月）である。

授業科目は、『講義一覧』<sup>12)</sup>に掲載されている。ただし、『講義一覧』といっても科目名・担当教員・開講時間程度で（教室は後日掲示が出る）、授業内容の文章による説明はない<sup>13)</sup>。表6には開講時間を載せなかったが、2時間のものが中心である<sup>14)</sup>。早い授業は、朝8時からスタートする。冬はまだ薄暗い時間帯である。1時限（何時～何時）、休憩時間（何時～何時）といった固定枠は設けていない。

地理学教室の出版物としては、『レーゲンスブルク地理学論集』<sup>15)</sup>があり、第24巻まで出版されている。内容は、学位論文を公刊したものが中心のようであり、ひとつの巻を一人の著者で書いているケースが多い。ちなみに、第24巻は、シースル著『第二次世界大戦後におけるレーゲンスブルクの住宅市場と住宅建設』である<sup>16)</sup>。

筆者のレーゲンスブルク滞在中には、地理学教室（あるいは各講座）主催の講演会も何度か行なわれた。学外の研究者を招いて、学内で講演してもらうものである。それらの他に講演会の類で目新しかったものとしては、7月上旬にあったプロイヤー教授の就任講義（Antrittsvorlesung）（演題は「リモートセンシングー地理学研究の最近の手法」）がある。彼は最近デュッセルドルフ大学からレーゲンスブルク大学に移ってきたようで、それでこの講義に引っ張りだされたというわけである。学生、地理学教室教員スタッフなど、多くの聴衆が集まって

表6 レーゲンスブルク大学地理学教室開講科目一覧(1994/95年冬学期)

開 講 科 目	担当教員
《地理学部門》	
<p>○講義</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・トルコ地理入門</li> <li>・南アメリカ</li> <li>・東アルプスの自然地理学</li> <li>・地形学・土壌学入門</li> <li>・地球の植生</li> </ul>	<p>マンスケ プロイヤー シュトゥルンク フェルケル エーリッヒ</p>
<p>【基礎課程】</p> <p>○講義</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地理学研究入門(新入生必修科目)</li> </ul>	<p>プロイヤー, オープスト エーリッヒ, シュトゥルンク</p>
<p>○初級ゼミナール</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地図学入門</li> <li>・自然地理学(地形学)入門</li> <li>・自然地理学(地形学)入門</li> <li>・自然地理学(植生地理学)入門</li> <li>・自然地理学(気候地理学)入門</li> <li>・人文地理学(農村)入門</li> <li>・都市地理学</li> <li>・人類地理学(経済・社会地理学)入門</li> <li>・人類地理学(経済・社会地理学)入門</li> <li>・空中写真判読I</li> </ul>	<p>ヴェルナー ハイネ フェルケル エーリッヒ ラング マンスケ ヴェルナー クライン グラーズベルガー プロイヤー</p>
<p>○中級ゼミナール</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・土壌学入門</li> <li>・地理学における学術理論的・方法論的基本問題</li> <li>・地理学における学術理論的・方法論的基本問題</li> <li>・主題図作成入門</li> <li>・地形図読図(自然・人文・経済地理学的テーマの諸事例) (地図学入門に合格していることを前提とする)</li> <li>・人類地理学</li> <li>・地理学者のための統計入門</li> <li>・STATGRAPH利用入門</li> </ul>	<p>未定 ラング クライン グラーズベルガー マンスケ  クライン クライン クライン</p>

<p>○実習</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実験室実習 I (自然地理学の実践的研究法)</li> </ul>	<p>フェルケル</p>
<p>【本課程】</p> <p>○中級ゼミナール</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・天然資源の分布調査と土地利用選択への助言 (事例よりも方法論を志向する) (10月に 5 日間)</li> <li>・自然地理学における計量的手法</li> <li>・植生地理学のための実践的研究法(特に学士試験受験者用)</li> <li>・中級者のための技術と手法のゼミ - ARC/Infoを例とした GIS入門</li> <li>・空中写真判読 II : ERDAS設備によるデジタル画像処理 II</li> <li>・アメリカの南西部 (巡検準備ゼミ)</li> </ul>	<p>ヘーベル</p> <p>未定</p> <p>エーリッヒ</p> <p>ユルゲンス</p> <p>ユルゲンス</p> <p>プロイヤー</p>
<p>○上級ゼミナール</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アメリカの農業地理学</li> <li>・経験的研究を伴う上級ゼミ (気候・水・土壌) (特に学士試験受験者用)</li> <li>・熱帯 (特に教員試補用)</li> <li>・植生地理学</li> <li>・トルコ - 東洋と西洋の間の境界地域</li> <li>・南・東アジアの発展途上国と中進国</li> <li>・経験的研究を伴う東バイエルンの交通地理学的調査 (経済学的・社会科学的研究方向の学士試験受験者のみ)</li> <li>・東バイエルン: 経済地理学的観点から見た中心地・工業・交通</li> </ul>	<p>プロイヤー</p> <p>ハイネ</p> <p>ハイネ</p> <p>エーリッヒ</p> <p>マンスケ</p> <p>ヴェルナー</p> <p>オープスト</p> <p>オープスト</p>
<p>○その他の授業 - 電子データ処理演習</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・SPLUS利用入門</li> <li>・WindowsのためのSPSS利用入門</li> </ul>	<p>ラウ</p> <p>ラウ</p>
<p>○コロキウム</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学術研究指導</li> <li>・学術研究指導</li> <li>・学術研究指導</li> <li>・経済地理学者のための学士試験受験者コロキウム</li> <li>・地理学コロキウム</li> </ul>	<p>ハイネ</p> <p>プロイヤー</p> <p>フェルケル</p> <p>オープスト</p> <p>プロイヤー, エーリッヒ, ハイネ</p> <p>マンスケ, オープスト</p> <p>リンシェーデ, シュトゥルンク</p> <p>フェルケル, ヴェルナー</p>

<ul style="list-style-type: none"> <li>○1日巡検 <ul style="list-style-type: none"> <li>・レーゲンスブルクの建物風化（94年10月28日）</li> <li>・マイン・ドナウ運河（94年10月26日）</li> <li>・デッゲンドルフ・シュトゥラウビング（94年11月5日）</li> <li>・ヴァイデン・ヴァルトザッセン・エーゲル（95年3月30日）</li> <li>・レーゲンスブルク都市巡検（95年3月1日）</li> </ul> </li> </ul>	<p>シュトゥルンク オープスト オープスト オープスト クライン</p>
《地理教育部門》*	
<ul style="list-style-type: none"> <li>○講義・演習 <ul style="list-style-type: none"> <li>・地理教育入門（基・本・実・ギ）</li> </ul> </li> </ul>	<p>リンシェーデ</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ゼミナール <ul style="list-style-type: none"> <li>・初級ゼミナール：地理教育入門（講義と接合する）（基・本・実・ギ）</li> <li>・初級ゼミナール：地理教育入門（講義と接合する）（基・本・実・ギ）</li> <li>・初級ゼミナール：地理教育入門（講義と接合する）（基・本・実・ギ）</li> <li>・一般地理学の諸テーマ（地理学主専攻の学生向けではない）</li> <li>・地誌入門（地理学主専攻の学生向けではない）</li> <li>・地理授業におけるメディアと方法（本・実・ギ）</li> <li>・地理授業におけるメディアと方法（本・実・ギ）</li> <li>・地理授業におけるメディアと方法（基・本・実・ギ）</li> <li>・授業計画：社会科地理分野の諸テーマ（基）</li> <li>・授業計画：地理授業における農業（本・実・ギ）</li> <li>・授業計画：地理授業における自然地理学的テーマ</li> <li>・専門教育の基本問題（研究実習と接合する）（基・本・実）</li> <li>・専門教育の基本問題（研究実習と接合する）（ギ）</li> <li>・専門教育の特別問題（試験学期用）（基・本・実・ギ）</li> </ul> </li> </ul>	<p>ハルトウル ハルトウル ハルトウル フォッセン フォッセン ハルトウル ハルトウル シュトゥルム シュトゥルム リンシェーデ・フォッセン リンシェーデ・フォッセン ハルトウル リンシェーデ リンシェーデ</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>○実習 <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校での研究実習（基・本・実）</li> <li>・学校での研究実習（ギ）</li> </ul> </li> </ul>	<p>ハルトウル リンシェーデ</p>
《地質学部門》	
<ul style="list-style-type: none"> <li>○講義 <ul style="list-style-type: none"> <li>・岩石学 I</li> </ul> </li> </ul>	<p>フレーリッヒ</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>○演習 <ul style="list-style-type: none"> <li>・地質学入門（巡検を伴う）</li> </ul> </li> </ul>	<p>ヴォルフ</p>

\* 地理教育部門の科目にある「基」は基幹学校(小学校), 「本」は本科学校, 「実」は実業学校, 「ギ」はギムナジウムの略である。  
資料：表2に同じ。



いた。もっとも、この就任講義は、レーゲンスブルク大学地理学教室ではこれが初めての試みだという。

もうひとつ目をひいたのは、2月中旬にあったクライン講師の大学教授資格審査講演(Habilitationsvortrag)である。これは、大学教授資格論文<sup>17)</sup>の内容を、居並ぶ学内・学外の教授たち(20人くらい)の目の前で講演するもので、講演の後は、教授たちからそれに対する鋭い質問・意見が飛ぶ。時間は、講演30分に対して、質疑応答1時間という構成であった。講演は公開で、学生も30人くらい聞きに来ていた。質疑応答の後は、関係者で大学教授資格を認めるか否かの会議が行なわれる。なお、結果は「合」とのことであった。

### Ⅲ. 授業聴講記

筆者は、レーゲンスブルク大学滞在中、地理関係の授業を何度か聴講した。本章では、そのうち「地理学研究入門」の授業について、その聴講記を記しておきたい。

この授業は、表6にもあるとおり、基礎課程の講義科目で、新生は必修である。受講生は、授業で見たかぎり150人くらい。授業担当者は、授業の順にあげると、シュトゥルンク、エーリッヒ、プロイヤー、オープストの4氏の回り持ちで(各人3回ずつ)、自然2人、人文2人という内訳になっている。

第1回めに、オリエンテーションのような地理の課程説明とスタッフの紹介があり、2回めから実質的な授業が開始する。前半は自然地理学の内容で、1人めのシュトゥルンク氏(11月)はスライドを用いたカルスト地形の話が中心、2人めのエーリッヒ氏(12月)は植生と気候についての講義であった。後半は人文地理学で、3人めのプロイヤー氏(1月)は、地理学の基礎的な文献紹介、文献の記載方法から始まって、人口地理学の内容、4人めのオープスト氏(2月)は主題図をふんだんに使った経済地理学の授業であった。

試験は2月の最後に(授業と同じ曜日ではないのだが)あり、不合格の学生には再試験も実施していた。どのような試験問題が出題されたのか、残念ながら試験まで出席しなかったので不明である。1月末にこの試験に関する告知があったが(掲示とプリント配布による)、それによれば、試験時間は90分、欠席回数2回までの学生が受験を許されるとある。出欠は、授業時間中に出席者の名前を書かせてとっていた。同じ告知には、試験勉強の参考になる文献リストを掲げていた。なお、教科書は4人の担当者とも使用せず、参考書を適宜指示していた。

ところで、人文地理学の両担当者は、毎回簡単な課題を出していた<sup>18)</sup>。列举すると、次のとおりである(1~3はプロイヤー氏の課題、4~8はオープスト氏の課題)。

1. 指示された文献記載方法に従って、あるテーマに関する文献リストを作成する。
2. ①世界各地域の出生率と死亡率の統計から、出生率と死亡率の相関グラフを作成する。②ボリビア・ニカラグア・日本3ヵ国における出生率と死亡率の推移の統計から、同じく各国

について相関グラフを作成する。

3. バイエルン州のゲマインデ（町村）別産業別就業者数の割合に関する統計を三角グラフに落し、グラフの中に線を引いて、ゲマインデを機能分類する。
4. ①今日自宅から大学まで来た経路と交通手段を図示する。市内では通りを、市外ではゲマインデ・市区を明示する。②故郷からレーゲンスブルクまでの経路・交通手段・所要時間を図示する（故郷がレーゲンスブルクではない学生の場合）。レーゲンスブルク出身の学生は、最後のバカンス旅行時の経路と交通手段を図示する。
5. ①チューネン・ヴェーバー・クリスタラーの3人の主要著作をひとつずつ挙げる。②それぞれの分野の本または論文をひとつずつ挙げる。③以上六つの文献の図書館請求記号を記す。
6. ①指定されたドイツ国内の15都市を、地図など見ないで、訪れた経験の有無別に白紙上にプロットする。②指定されたヨーロッパの15都市を、白紙上にプロットする。
7. 東バイエルンの郡別産業別就業者数の統計をもとに、任意の方法で主題図を作成する。
8. 就職活動、大学での学習内容などに関するアンケートの回答。

以上のうち、4、6は授業時間中の作業で、あとはみな宿題である。課題4と6はメンタルマップに関するもので、最後の授業でオープスト氏はこの課題の解説をしていた。課題のレベルとしては、新入生対象ということもあって、比較的容易であろう。

#### IV. おわりに

以上本稿では、筆者の経験に基づき、レーゲンスブルク大学地理学教室の概要と授業聴講記を記してきた。しかしながら、筆者はあくまで外部者であり、正規の学生として学籍登録したわけではないので、授業聴講記といっても、ほんの一部をかいま見た程度である。授業の中心となるゼミについても、結局参加する機会が得られず、ここに報告ができなかったのは残念である<sup>19)</sup>。また、基礎課程から本課程への進級、学士・修士・博士・教職の取得などに関する規程も、不分明のままであった。地理学教育の重要な側面が欠落し、隔靴搔痒の感は否めないが、やむを得ない。もっとも、本稿は、ドイツの大学の地理学教室について、見聞したことをメモにとどめておきたいというのが趣旨であり、そのあたりの事情を御賢察いただければ幸いである。

最後に、本稿の前半は、雑誌『地理』（古今書院）に連載中の「地理学教室あんない」に、Ⅲ章の授業聴講記は、浮田典良『大学地理教育とレポート』<sup>20)</sup>に示唆を受けたことを付記しておく。

## 注

- 1) *Vorlesungsverzeichnis der Universität Regensburg*, Universitätsverlag Regensburg.
- 2) 前掲注1)。
- 3) ドイツの大学には入学定員がなく、ギムナジウムの卒業資格試験 (Abitur) に合格すれば、原則としてだれでも自由に大学に入学することができる。ただし、大学進学希望者が増えたため、学部・専攻によっては入学者選抜を行なうようになっている。レーゲンスブルク大学では四つの学部と二つの専攻に入学制限がある。
- 4) *Der Rektor der Universität Regensburg* (Hrsg.), *Universität Regensburg - 4. überarbeitete Aufl.*, 1992, S. 9.
- 5) 地理専攻を含め、人文学部Ⅲには入学者選抜はない。
- 6) ドイツでは学期によって大学を変わることができ、また休学もあるから、この数字からすぐに中退者数を求めるのは早計である。しかしながら、途中で学業を断念する学生が多いのは事実であろう。
- 7) Heinritz, G. und R. Wiessner, *Studienführer Geographie (Das Geographische Seminar)*, Braunschweig: Westermann, 1994, S. 173-174. 本書は、ドイツの大学の地理学教室について、その概要を知るのに便利である。地理専攻志望学生を念頭において編集されており、地理学の諸分野や教育課程の説明とならんで、ドイツの各地理学教室の紹介に多くのページを割いている。
- 8) 前掲注7)。各課程学生数の合計は872名になり、地理主専攻学生数894名と一致しないが、典拠の記載のままにしておく。
- 9) 修士課程は学士課程の後にあるのではなく、入学時から学士課程・修士課程・教職課程に分かれるようになっている。
- 10) 図書館利用係配布の案内プリントによる。
- 11) 余談ではあるが、教員の持っている建物の鍵は図書館分館にも合うようになっており、したがって、日曜日のような図書館閉館時にも、教員は自由に分館の錠を開けて、中の図書を利用することができる。
- 12) 前掲注1)。「講義一覧」は、書店などで安価な値段で販売されている。
- 13) 地理専攻の学生会 (Fachschaft) が、「注釈付き講義一覧」という掲示を出しているのを見かけた。これは、学生会が各教員に、講義内容・レポート・試験・文献等に関するアンケート用紙を配って、その回答をまとめたものである。ドイツの大学生にも、やはりこのような情報が求められているのであろう。
- 14) ただし、アカデーミッシュェス=フィヤテル (akademisches Viertel) といって、授業を定刻より15分遅く始め、15分早く終える習慣がある。
- 15) *Regensburger Geographische Schriften*, Institut für Geographie an der Universität Regensburg.
- 16) Schiessl, R., *Wohnungsmarkt und Wohnbautätigkeit in Regensburg nach dem II. Weltkrieg (RGS 24)*, 1991, 204 S.
- 17) 教授になるためには、博士論文の後、さらに大学教授資格論文を書いて、その資格を得ておかなければならない。
- 18) ただし、このような課題が講義で出されることは少ないようで、筆者が何度かのぞいた他の講義では、このようなことは見られなかった。
- 19) ゼミの中心になるのは学生の発表で、その後質疑応答がある。発表内容をまとめたレポートも提出する。たまたま見かけたレポート集は、どのレポートも20ページ以上ある長いものだった。
- 20) 浮田典良『大学地理教育とレポート』, 古今書院, 1994, 138頁。